

市川市 令和2年度完了報告書

1. 調査研究概要

本調査研究では、本市の掲げている「人をつなぐ 未来へつなぐ 市川の教育」の実現に向けて、教育政策の方針として社会の変化を見据えた教育環境の整備を図り、市川の質の高い教育を推進することを目的とし、さらに児童生徒に「実生活で生きて働く力」を身に付けさせるために、各学校の「いちかわ学校三ヵ年計画」をもとに、調査研究の3つのテーマから、カリキュラム・マネジメントの在り方の研究を行った。

研究を進める中で、コロナ感染症が全世界に猛威を振るい、今までに経験したことのない学校生活様式が求められる年となり、本市では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対応が進む中で、教育委員会と各学校で取り組んでいる教育課程の編成や工夫そのものが、全国の学校で求められているカリキュラム・マネジメントの知見に資する価値があるものと考え、ウイズコロナの学校経営、学びの保障、カリキュラムやPDCAサイクルの見直し等、研究の継続を行った。

これらを踏まえ、研究のまとめ方としては、当初計画していた「手引き」ではなく、本市のカリマネ研究の基本的な考え方と研究校の事例紹介を中心とした実践報告書の形でまとめることにした。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
6月	契約
7月	事務局打合せ
9月	カリキュラム・マネジメント検討委員会①
12月	事務局打合せ
1月	各学校訪問
2月	カリキュラム・マネジメント検討委員会②
3月	報告書の作成

2. 調査研究の内容

実践校【市川市立富貴島小学校】

(1) 研究テーマ

<a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究>

豊かな心を求めて「深い学びを育む言語活動の探究」

～主体的に読み、豊かに表現する児童の育成～

(2) 調査研究の内容

昨年度は、それまでの「主体的・対話的で深い学び」を生み出す言語活動の探究に加えて、特に研究仮説の「系統立てる」を意識し、年間を通して読むことの指導事項をどのように児童に身につけていくか、計画的に取り組むことができた。また、年度初めに「主体的な姿」、「対話的な姿」、「深い学びの姿」を教員間で共有することで

担当する学年に応じた姿をイメージし、系統的に指導することができた。

これまで、本校では、国語科の3領域の中から「読むこと」の領域に焦点を置き、主体的・対話的かつ系統的に指導を行ってきた。また、指導事項には設定していないものの、言語活動を進めるにあたって、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の指導も行ってきた。本年度からは、核となる「読むこと」と合わせて、「話すこと・聞くこと」、又は、「書くこと」の指導事項についても単元プランシートや指導案に明確に設定していく。研究副主題にもある「豊かに表現する」といった力を、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の指導を通して育むことで、核である「読むこと」の力についても、これまで以上に、より良く身に付けていけることが期待できる。

また、学びの系統性について、次のように意識していく。

①国語科における学年内の系統性

説明文や物語文など、それぞれの文の特性に応じて系統的に指導を行う。

【例】5年の「大造じいさんとがん」で、一つの優れた叙述について自分の考えをもつことができた。同じく5年の「雪わたり」では、複数の優れた叙述を関連させて、自分の考えをもつことができた。

②国語科における学年間の系統性

言語活動の履歴表を見て受けもっている児童がどのような学びをしてきたのか、歴代の学年はどのような授業を展開してきたのかを見ることで言語活動を設定する際の参考にする。

【例】3、4年では、要約に力を入れてきている。→5年では、物語の読解を中心に取り組む。

③教科領域間の系統性

国語で学習したことを他教科で生かしたり、他教科等と絡めたりしながら言語活動に取り組む。

【例】報告文を作る。→総合的な学習の時間で米作りについてまとめる。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

- 「読む」だけでなく、「話す・聞く」「書く」を加えた3領域の関連を意識して取り組んだことで、それぞれの指導事項についても吟味していく機会となった。
- 図書館司書と連携し、言語活動や児童の実態を踏まえて、並行読書材の選書を深く吟味する意識が高まった。
- 児童が学習時に記入する振り返りシートの「学習の振り返り」から、各単元における交流を含めた具体的な学習活動や教師の指導・支援を通して、身につけたい力のうち、より具体的な力の伸長を実感していることがわかる。
- お互いの考えを交流し合うことを通して、自分の考えを広めたり深めたりすることについての意義を感じる児童が増えてきたことが、ノートやワークシートからの記述でわかる。
- 話し合い活動の基盤は、児童の心や人間関係に深くかかわっている。相手を思いやり、尊重しながら取り組むことを繰り返すことで、心の成長が見られた。
- 学習のゴールを提示することで見通しをもち、自ら学習計画を立てる力がついてきている。そのことが主体的な学びにつながっていると考える。こうした国語科における学び方は、他の教科・領域の学習でも徐々に活かされている。

【課題と改善方策】

- 「これからの時代に求められる資質・能力」として「実生活で生きて働く読む能力」を国語科の学習を柱に育んできたが、国語科で学んだことを他の学習で活かすことを意識して臨まないで、学校における学習が実生活において十分活かされない懸念がある。そのために、これまで学んだ知識や技能を活用して新たな知識等を生み出す学習がもっと必要ではないか。そこで、総合的な学習の時間における探究活動と関連させて研究を推進することが効果的なのではないかと考える。
- 「読む力」が向上しても、友達との交流においてうまく表現することができない、話を聞くことができない反省を受け、「読む」から「話す・聞く」「書く」の領域に研究の視点を広げたことで、学習のねらいが焦点化しづらくなったという意見があった。
- コロナ禍において臨時休校や学習の制限もあり、他の教科・領域の学習との関連について十分に取り組めなかった。来年度は教科等の枠を超えた横断的な学習により力を入れていきたい。
- 学習の様子や児童・保護者のアンケート結果から、児童の学力が高まり、児童自らが成長を実感していることがわかる。しかしながら、コロナ禍にあって今年度全国学力・学習状況調査が中止になるなど、客観的な学力の検証が十分とは言えない。また、児童一人一人の成長・変化について詳しく見取り、個に応じた指導・支援していくことが今後求められる。

【総括して】

2年間の調査研究は、「いちかわ学校三カ年計画」を推進するために大いに役立った。目指す児童像からどのように教育課程を編成し、本校の特色ある教育活動である読書教育を基盤に校内研究で取り組む国語科を柱として「実生活で生きて働く読む能力」を育むために、計画・実践・評価・改善を図りながら取り組むことができた。コロナ禍にあって学習活動の制限もあったが、今回の調査研究の成果と課題を踏まえて、本校の学校教育目標である「清新の意気高く、明るく豊かな子ども」を目指して教育活動を引き続き

推進していきたいと考える。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	低・中・高各学年部会（年間指導計画・学習シートの見直し）
7月	低・中・高各学年部会（コロナ禍における国語科の学習の進め方について）
8月	教材研究（各自）
9月	研究推進委員会（授業研究の進め方について） いちかわ学校三カ年計画【創意と活力ある学校づくり】推進計画書作成
10月	高学年部会指導案検討 いちかわ学校三カ年計画【創意と活力ある学校づくり】推進計画市教委面接
11月	高学年部会授業研究 低学年部会指導案検討
12月	低学年部会授業研究 中学年部会指導案検討
1月	中学年授業研究 研究推進委員会（研究紀要作成について）
2月	研究紀要作成 研究推進委員会（今年度の振り返り・次年度の研究の方向性）
3月	研究全体会（今年度の振り返り・次年度の方向性） いちかわ学校三カ年計画【創意と活力ある学校づくり】推進計画 （今年度の振り返りと来年度の方向性）

実践校【市川市立宮田小学校】

(1) 研究テーマ

学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

みんなで楽しい学校生活を創り、「学びに向かう力」が育つ特別活動の実践
—学級活動における話し合い活動の充実を通して—

(2) 調査研究の内容

- 「人間関係形成力」を育み自己有用感を高める、学級活動における話し合い活動の指導方法及び評価方法の工夫
- 「課題解決能力」を育む、各教科と往還する特別活動の効果的な教育課程の編成及び評価方法の工夫

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方法

【児童対象「学級会アンケート」から】

- 「学校が楽しくなった」「友達の話聴く」「自分の考えを話す」「協力して話し合う」「ルールを守って話し合う」についての問いに、90パーセント以上の児童が肯定的な考えを示している。このことから、「聴き合い」「話し合い」「協力し合う」活動を通して、多様な他者との違いや多様性を認め、協働して活動に取り組もうとする「人間関係形成力」が培われていることがわかる。
- よりよい学級・学校生活づくりなどを通して、様々な問題に向けて取り組む意欲や工夫して取り組む姿勢、協力してよりよいものにしていこうとする「課題解決力」も向上していることがわかる。

【保護者学校評価アンケートから】

- 「学校は保護者や地域の方々とともに、子どもを育てる取組を進めている」の評価項目で、95パーセント以上の保護者が肯定的な回答をしている。学校経営方針を示

し、家庭や地域の資源を生かしながらともに歩む開かれた学校が求められている。

- 学校と家庭・地域社会の双方向のコミュニケーションは、両者の関心が高ければ高いほど、リスクを伴う。社会の期待と懸念に耳を傾け、自律性・地域性を確保するカリキュラム・マネジメントを創ることが重要である。

【教職員アンケートから】

○教職員それぞれの職務におけるカリキュラム・マネジメント力の向上は、この研究の目的の一つであった。職員の学校経営参画意識と合意形成能力の向上は、学校運営上の成果である。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	始業式・入学式 分散登校
7月	学校運営協議会
9月	前期アンケートの結果分析 特別活動・能力の各教科領域・部会ごとの振り返りと改善 学校運営協議会（中学校ブロック合同開催） 第1回授業研究会（朝日新聞社取材） 第2回授業研究会
10月	千教研市川支会道徳部会 模擬授業
11月	創立70周年記念式典・記念学習発表会 学校運営協議会
12月	第3回授業研究会 児童生徒質問紙と関連をもたせたアンケート、保護者・地域アンケート等を実施・分析 縦割り活動「アドベンチャー集会」
1月	道徳科授業研究会
2月	国語科・算数科授業研究会 令和2年度 研究紀要原稿作成 伸ばせた資質・能力の整理と課題
3月	研究のまとめと次年度に向けて 研究紀要印刷製本 道徳科との成果の共有 研究報告書の作成 校内推進委員会による検討会（次年度教育課程の編成に向けて）

実践校【市川市立第一中学校】

(1) 研究テーマ

<b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究>

(2) 調査研究の内容

- ① 学習に対する意識を見るアンケートを実施
- ② 各教科、領域において、地域と学習のつながりを取り入れた特設授業を展開
- ③ 地域ボランティアを実施
(近隣の高等学校と連携した地域清掃ボランティア)
(地域のお年寄りに配付するクリスマスカードの作成)
- ④ ①と同じアンケートを実施し、学習への意識の変化を考察

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

事後アンケートの結果から、特設授業と、ボランティア活動を経ることで、学習への意識が高まったことが、見てとれた。ただし、ボランティア活動はあくまで任意であるため、活動に参加した生徒と、参加しなかった生徒の間には、意識の変化を示す数字には開きがあった。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	
7月	実施計画作成
8月	
9月	協力校への連絡調整
10月	
11月	事前アンケート 特設授業の実施
12月	地域ボランティア実施 特設授業の実施
1月	事後アンケート アンケートの集計
2月	
3月	

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

- 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、臨時休校や授業時間の短縮、行事等の制限がある中、各校が効果的にカリキュラム・マネジメントを実施し、教育課程や年間指導計画の見直しを行うことができた。
- 各校ともカリキュラム・マネジメントの視点から、各学校の研究をより深く探求することができた。
- 「いちかわ学校三ヵ年計画」を作成し、学校教育目標の実現に向けて、PDCAサイクルの機能を生かして取り組むことができた。
- 学校がコロナ禍の対応を経験し、教職員のカリキュラム・マネジメントの大切さの意識が高まってきている。
- 3校の取組を今後、どのように市内の小中学校に周知・活用していくか。
- 市内のリーダー研修等での活用を活かしていきたい。